

第37回
西洋社会科学古典資料講習会

2017年10月25日(水)～27日(金)

一橋大学社会科学古典資料センター

2017

講 義 日 程

第1日 10月25日(水)

- | | | | | |
|---|-------------|--|------------------------------------|----|
| | 8:50～ 9:10 | オリエンテーション | | |
| ① | 9:10～10:40 | 書誌学 (I) 西洋古典資料の目録作成 | 床井 啓太郎 一橋大学社会科学古典 資料センター専門助手 | 1 |
| ② | 10:55～12:25 | 書誌学 (II) 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員 のための書誌学入門 | 武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授 | 6 |
| ③ | 13:45～15:15 | 書誌学 (II) 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員 のための書誌学入門 | 武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授 | |
| ④ | 15:30～17:00 | 古典研究 (I) ギリシア古典の世界とコンスタンティ ノーブル | 大月 康弘 一橋大学大学院経済 学研究科教授 | 11 |
- 懇親会 (17:20-19:20)：希望者のみ

第2日 10月26日(木)

- | | | | | |
|---|-------------|---------------------------------------|-----------------------------|----|
| ① | 9:10～10:40 | 保存・修復 (I) 紙、及びその劣化と保存 | 三浦 功美子 伝世舎代表 東洋書画保存修復 | 15 |
| ② | 10:55～12:25 | 古典研究 (II) ユストゥス・メーザー『祖国愛の夢』 を読む | 鈴木 直志 中央大学文学部教授 | 20 |
| ③ | 13:45～15:15 | 保存・修復 (II) 西洋古典資料をもっと知るために | 岡本 幸治 製本家・書籍修復家 | 24 |
| ④ | 15:30～17:00 | 一橋大学社会科学古典資料センター見学 | | |

第3日 10月27日(金)

一橋大学附属図書館見学 (9:00～9:45)：希望者のみ

- | | | | | |
|---|-------------|----------------------------------|---------------------------------------|----|
| ① | 10:00～11:30 | 古典研究 (III) カーネギー国際法古典叢書探訪 | 大中 真 桜美林大学リベラル アーツ学群人文学系 准教授 | 30 |
| ② | 12:50～14:20 | 書誌学 (IV) 目録作成実習 | 福島 知己 一橋大学社会科学古典 資料センター専門助手 | |
| ③ | 14:35～16:05 | 展示論 東大駒場博物館『マザリナード集成』 展の試み | 一丸 禎子 学習院大学非常勤 講師 | 34 |
| | 16:20～16:40 | 修了式 | | |

※第3日のみ各時限の開始時間が異なりますのでご注意ください。

西洋古典資料の目録作成

床井 啓太郎

(一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)

1. はじめに

この講義では、主に 19 世紀より以前に西洋で出版された古典資料の目録作成について、特に国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録作業の実際に即して、注意点を考えていきたいと思えます。目録作成は、AACR2 (英米目録規則第 2 版) における初期刊本に関する規程(2.12-2.18)の拡張規則である Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981 (以下 BDRB) と、その邦訳『稀観書の書誌記述』国立, 一橋大学社会科学古典資料センター, 1986 (一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11) に基づいて行います。また、BDRB の最新版である Descriptive cataloging of rare materials (books). Washington, D.C., Library of Congress, 2007 (DCRM (B)) の変更点についてもできる限り触れることにします。

2. なぜ特別の目録規則を使用するのか

古典資料でも一般書でも、目録作成において注意すべき点に大きな違いはありません。①情報源から必要な情報を正確に読み取り、②読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、③適用する目録規則に基づいて正確に書誌の記述を行う、という基本的な作業が常に重要です。ただし、古い本の場合には、現代の本との出版事情の違いを意識して書誌作成にあたる必要があります。

一般書と「古典資料」の区分は明確に定まっているわけではありません。区分の方法あるいは基準とする年代は館ごとに異なると思いますが、年代で区分する場合は概ね 18 世紀後半から 19 世紀に基準点を置いて、その前後で扱いを変えるケースが多いようです。この 18 世紀後半から 19 世紀という時代は、出版に関連する技術が大きく変容した時代でもあります。この時代に組版、印刷、製本、製紙など多くの分野で技術革新および機械化が進み、現在と同様に「同一の出版物を大量に生産する」ことが

可能になっていきました。

現在われわれが総合目録データベースにおいて採用している所蔵管理の方法は、多数のコピーの同一性を維持することが可能な、現代の出版物の特性を前提に成り立っています。一定の事項（タイトル、出版年、版次...）が一致する出版物は、一定の同一性を持っているとみなすことができるからこそ、限られた書誌事項のポイントが一致している資料を同一物であるとみなして、一つの書誌の下に管理することが可能なわけです。これに対して、同一物を機械的に大量生産する技術が確立する以前に出版された本の様態は、もっと不安定なものでした。この時代の資料には、タイトル、出版年、版次などの基本的な要素が一致していても、判型や折丁の構成が異なっていたり、差し替え紙葉が含まれていたり、もっと細かい組版上の差異が存在するようなケースが数多く見られます。こうした資料については、極端に言えば同一のものは二つと存在しないという前提に立って、コピー間の差異を明確に認識できる形で1点毎に書誌を登録することが必要になる場合もあります。『稀観書の書誌記述』はそうした詳細な書誌記述を行うのに適した目録規則とすることができます。

『稀観書の書誌記述』では、タイトルや出版者、製作者の記録などについて、古典資料独特の様態に応じて、省略や置き換えをせずにあるがままを記述することが可能です。その他、基本的に AACR2 に準じる内容であることから、目録作成に AACR2 を使用している館であれば、導入が容易な点もメリットのひとつです。ただし、AACR2 と細部で異なる点や、相反する規定もありますので、これに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。講義では、実際の資料を題材に古典資料の目録作成のポイントを確認していきます。

3. 目録作成

ここでは、『稀観書の書誌記述』に基づいて目録を作成する際の注意点を、AACR2 の規定と比較しつつ、書誌事項ごとに簡単にまとめておきます。（**反転**は『稀観書の書誌記述』の規程）

<TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができる場合が多い現代の出版物と異なり、古典資料では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、「著者～の...」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。

“I. A. Comenii～”＝「コメニウスの～」のように、著者名が属格で書名に掛かっている場合、文法的に分離できないので、全体をタイトルとして記録する。

- ・ ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。
- ・ “I / J”、“U / V / W”の転記に注意する。(0H.)
- ・ 本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。(1B8.)
(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限り、縮約する。)
- ・ 責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)
(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に 4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は) ...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)
- ・ タイトルページ、その裏面および先行部分 (preliminaries)、または奥付にある責任表示を、そこに表示されている形で責任表示として記録する。責任表示をタイトルページ以外からとった場合は、それを角がっこに入れて、その情報源を注記に示す。(1G1.)
(AACR2 1.1F1. 主情報源以外の情報源から得た責任表示は、角がっこに入れる。)
- ・ 責任表示がタイトルページ、その裏面および先行部分 (preliminaries)、または奥付以外の情報源中にあるとき、または外からの情報源からとった場合は注記エリアにそのことを記録する。(1G2.) →責任表示エリアには記録しない

<ED>

- ・ 版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)
- ・ 別刷 (issues) または刷 (impressions) に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていても版表示として記載することができる。(2B2.)
(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報は ED フィールドに記録してはならない。)

<PUB>

- ・ 15-16世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されている場合がある。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)
- ・ 出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実 (先行する必要な語句とともに) によって転記する。(4C2.)
(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)
- ・ 出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべ

てを記録する。(4C6.)

(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のもの順で、記録する。...2 番目以降は「選択」である。)

- ・出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)

(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのまま記載する。)

- ・2 つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が 2 箇所以上にあり、それらの地名が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・年を示すローマ数字を、それが誤りであったりミスプリントでないかぎりアラビア数字にかえる。(4D1.)

ローマ数字の表記：M=1000, CIƆ=1000, D=500, IO=500, C=100, L=50, X=10, V=5

*CIƆ IO C X L=1640

<PHYS>

- ・1800 年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。(5D1.)

*(8vo)=8 折版

- ・印刷のない丁またはページ、広告類も数量の表示に含める。広告類を記録した場合は、必ず注記でそれを示す。(5B1.)

(AACR2 2.5B3. なくてもよいもの (広告、白紙ページなど) で番号づけのない部分は無視する。)

<VT>

- ・<TR>の記述は、“I/J”、“U/V/W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TT に転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・その著作の書誌的来歴について注記する。(7C7.)

*NOTE : The first of the Elzevir editions of the Janua

- ・色刷りが重要な特質を備えていれば注記する。インキュナブラの色刷りは必ず注記する。(7C10.)

*NOTE: Title in red and black

- ・挿図のより完全な細目を記載する。(7C10.)

*NOTE: Title vignette (printer's device with motto "Non Solus")

- ・ページ付けの誤りを注記。

*NOTE : Errors in paging: 207 numbered 205 (2nd group)

記述書誌を“読む”面白さ

— 図書館員のための書誌学入門 —

武者小路 信和

(大東文化大学文学部准教授)

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業の主導・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向かなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？ インターネットで〈本文〉を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A.J. West. *The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios* (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を

82点（現存するものの1/3以上）所蔵しており、次いで明星大学の11点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。

たとえば、David Pearsonはその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts* (London: British Library, 2008; rev. ed. 2011: 邦訳『本：その歴史と未来』(ミュージアム図書 2011))において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に持つ個性（たとえばブックデザイン、来歴・書き入れ、製本など）を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。（読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本です。）この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約30年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』（1543）の初版と第2版約600冊の現物調査（とくに書き入れの調査）を行いました[Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus* (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566) (Leiden: Brill, 2002)]。この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』（早川書房 2005）では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する同一本・同一タイプの資料にできるだけ多く直接あたって調査する研究方法は、数は少なくとも、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、各図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

現在のようなインターネット／デジタル時代に古典資料を扱う図書館員（古書籍業者を含む）にとって、古典資料がもつ個性、つまり本文（テキスト）、製本、来歴 (provenance)、書き入れなど、印刷・出版・造本・所有・読書・利用に関わる歴史的「個性」を見抜くちからが、特に求められているように思われます。そして歴史的「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が不可欠です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列挙（分類）書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を

指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」(山下浩)としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果(書誌類・論文など)を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。(図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。)

今回は、(書誌学の研究成果を活用するために必要な)書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎 (I)：本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎 (II)：記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎 (III)：印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に取り上げる予定です。

「本の仕立て」(その本がどのような折り丁によって構成されているか)は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、(理想本について記録した)記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

- ①どんな本であるのか(著者、出版者、出版年など)
- ②どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか(他のコピーとの関

係)

③完全なコピーであるのか（本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか）といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

*図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本（ideal copy：市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本）の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との（交流や諍い・いざこざを含む）関係などを知ることができただけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

- ・雪嶋宏一『西洋古版本の手ほどき 基礎編』（明治大学リバティアカデミー 2011）
西洋書誌学の基本を知るうえで便利な日本語の文献。
- ・高野彰『洋書の話』増補版（丸善 1995）
記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。
- ・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009)

書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS)のサイト <http://rarebookschool.org> から HOME > PRODUCTS > BOOKS & PAMPHLETS > TANSELLE,とたどると、冊子版が有料で販売されていますが、「Also available as a PDF file.」とリンクが貼られていて、そこをクリックすると PDF ファイルが無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）

- ・*Marks in Books*.(Cambridge, MA: Houghton Library, Harvard Univ., 1985)

Harvard 大学の貴重書図書館 Houghton Library が所蔵する、さまざまな「個性」をもった本が紹介されています。

皆さんの図書館にもこのようなお宝が眠っているかもしれません。

- ・書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker. が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB) のサイト https://www.ilab.org/eng/documentation/29-abc_for_book_collectors.html から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)Google で Carter, John. *ABC for Book Collectors* を検索し、最初の方に表示される ILAB のサイト内のものをクリックしても見つかります。

本書(第六版)の邦訳:『西洋書誌学入門』(図書出版社 1994)(ビブリオフィル叢書)

- ・安形麻理『デジタル書物学事始め』(勉誠出版 2010)
最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知ろううえで有用な本です。樫村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法: HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』(慶應義塾大学出版会 2010)も参考になります。
- ・シェイクスピアの最初の全集 First Folio(1623)の現存本の世界規模の所蔵調査については、Eric Rasmussen and Anthony James West, ed. *The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue*. (Palgrave Macmillan 2012)も出版されている。ここでは明星大学の所蔵点数は 12 点。
編者の一人であるエリック・ラスムッセンの『シェイクスピアを追い! 消えたファースト・フォリオ本の行方』(岩波書店 2014)が出版されている。
- ・紙の歴史については、従来の紙の歴史を扱った本と内容面で大きく異なるが、ローター・ミュラー『メディアとして紙の文化史』(東洋書林 2013)があり、興味深く読める。
- ・ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ『解説 アルキメデス写本: 羊皮紙から甦った天才数学者』(光文社 2008)も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。
- ・書誌学・古典資料関連の web サイト(日本語)としては、私立大学図書館協会西洋古版本研究分科会のサイト「西洋古版本について学ぶサイト」http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/early_p_book/abc-for-earlybooks/index.htmlがあります。

ギリシア古典の世界とコンスタンティノープル

大月 康弘

(一橋大学大学院経済学研究科教授)

1. コンスタンティノープルの写本工房が選んだ道

アルキメデス (Archimedes, Αρχιμήδης, B.C. 287-212 年) といえば、浴槽で浮力の原理を発見したシラクサの哲人である。そのアルキメデスのテキストを伝える新発見の写本がある。それは、13 世紀のコンスタンティノープルで作成された祈禱書で (パリンプセスト)、その下からそれまで未知の『浮体の原理』を含む 7 つの論文を伝えていた。

シラクサの大数学者が残した貴重なテキストが、10 世紀のコンスタンティノープルで筆写され、13 世紀にこの町で「抹消」された。その背後にあるギリシア古典の世界と、コンスタンティノープル／ビザンツ帝国の文化史的立ち位置についてご紹介したい。

2. 文化を運んだ羊皮紙

アレクサンドリアは、ヘレニズム期の地中海世界における卓越した学芸の中心地だった。ギリシア世界の各ポリスは、その蔵書に学び、筆写に努めていた。紀元前 3 世紀、小アジアのペルガモン (現ベルガマ) がアレクサンドリアと政治的に対立したとき、パピルスが同地に輸出禁止となった。このときペルガモン王の命で発案されたのが羊皮紙だった。町の名に由来して *pergamenum* と呼ばれた羊皮紙は、ヨーロッパ＝地中海文明の伝承に多大な役割を担った。

3. アレクサンドリア——ギリシア文化の合流地点①

B.C. 332 年にアレクサンドロス大王によって建設された町は、その部下プトレマイオス 1 世によって、エジプト経営の拠点となった。B.C. 280 年には「ムーサの神殿」*Mouseion* と呼ばれる世界初の博物館が造られた。この施設は王宮の建物群のなかに建てられ、学者たちの交流のためにスペースや椅子を配した屋根付きの通路や拱廊を備えていた。古代世界随一の蔵書を誇り、広い大食堂も隣接してあった。その空間で「共に飲み」*sympono* 議論をしたことから、*symposion* という言葉が誕生する。

B.C. 235 年に同図書館長に任命されたエラステネス (B.C. 275-194) は、地球全周

の長さなどの問題に一定の正解を与えたことで有名。またアルキメデスが尊敬する年長の友人で、しばしば文通した。「アルキメデス写本」も彼への書簡によって後世に伝えられた。

4. コンスタンティノープル——ギリシア文化の合流地点②

(1) 古典文化の ^{はこぶね} 方舟

アレクサンドリア博物館は、王宮の大半とともに、270年にローマ皇帝アウレリアヌスがパルミラ女王との戦いのなかで破壊された。さらに391年、アレクサンドリア総主教テオフィロスが、この異教の文化遺産を保存する博物館の分館セラペウムを攻撃した。415年には、狂信的で無学なキリスト教徒集団が暴徒化し、著名な女性数学者ヒュパティアを殺害する事件まで起こった。こうして、古代ギリシアの学術拠点はその神々とともに没落した。

ローマ帝国がキリスト教を公認し(313年)、これを国教化したとき(392年)、ギリシアの文化遺産は「有害」あるいは「不適切」とされた。蒙昧なキリスト教徒が古代世界の遺産を破壊したわけではない。古来の文献を積極的に筆写しなくなったのだ。

しかし、キリスト教の信仰、あるいはまたその修業において要請されたギリシア古典もあった。修辞学や幾何学がその代表。ホメーロスやエウクレイデス(ユークリッド)は、なお学習目標とされた。その他の大半のギリシア古典は顧みられることがなくなった。すでにある古典文献を保持する意欲は、今やただ一ヶ所、帝都となった^{はこぶね}コンスタンティノープルのみになった。コンスタンティノープルが、古典作品の ^{はこぶね} 方舟となった。アルキメデスの『方法』を含むエラトステネス宛て書簡(のコピー)もここに残った。

(2) マケドニア朝ルネサンス——フォティオスとレオン

9~10世紀、マケドニア・ルネサンスと呼ばれる時代があった。867年に即位したバシレイオス1世(在位867-886年)がマケドニア地方出身だったことに由来する呼称である。バシレイオスと、息子レオン6世(在位870(当初共治帝として)-912年)、また、孫のコンスタンティノス7世(在位908(当初共治帝として)-959年)の治世は、対外的な安定に伴い、文化活動が盛り上がった黄金期だった。

①フォティオス

文人フォティオス Photios (820-897年)は当時の代表的人物。2度にわたりコンスタンティノープル総主教になり(在位858-867年、877-886年)、正教会では聖人とされる。彼は、ギリシア古典への造詣が深く、首都に設置された哲学大学の教授だった。

彼の主著『古典文献総覧』Bibliothecaは、彼が845年にアッパース朝バグダッドの宮廷へ使者として派遣された際に執筆された。これは、280冊のギリシア古典に関する書評集で、自身が読んだ書物を、作品の要約や著者の経歴、採用された記述様

式などとともに記している。内訳は、キリスト教関係文献が 158 冊、世俗文献が 122 冊。122 冊の世俗文献は 99 人の著述家の作品で、詩形式のものは見当たらないが、歴史、修辞学、哲学、科学と、すべてのジャンルに及ぶ。歴史が一番多く、31 人の 39 作品。アッバース朝の宮廷人たちの関心は、ギリシアの科学、哲学、薬学にあった、と興味深い記述も見られる。

フォティオスはどこでそれらの書物を読んだのか。『古典文献総覧』中には関連する言及がなく、自身で写本を筆写した、との記述もない。バグダッドに使節滞在中の執筆が蓋然性をもつとしても、コンスタンティノーブルでそれらの文献を閲読していた、と推測される。宮廷ないし哲学大学の蔵書が基礎になっていた可能性がある。

②哲学者レオン

コンスタンティノーブルは、技術と科学、思想と哲学などが幾重にも織りなす文化空間で、4 世紀来、学問を求める青年たちを魅了し、いくつも私塾があった。

レオンは、ギリシアの科学全般、特に数学を教えるヘレニストで、帝都で私塾を開いていた。市井の教師ながら、バグダッドの宮廷に招聘される。が、皇帝テオフィロス（在位 829-842 年）に慰留されて残り、「40 人殉教者教会」付設の学校で教えた。じきにテッサロニキ大主教に任命されたが、843 年に正教が復活すると、罷免されて首都に戻り、今度は宮殿内の一画マグナウラ Magna aura に創設された大学で哲学教授になった。宮殿内のその学校で、レオンは、幾何学、算術、天文学（四学科 quadrivium 中の三科）を教授した。

マケドニア・ルネサンスは、まさにギリシア古典の再生期だった。この時代の特徴として、百科全書的な文化総覧の傾向があった。宮廷の儀礼、有職故実、法典など、世俗の著述に関する集成がなされ、当時参看できた書物の目録作り、さらには項目ごとのレファランス類が作成された。

そのような作品群のなかに、『スーダ』*Souæda* とよばれる辞典がある。10 世紀半ば、ないし後半に成立した百科全書的作品だ。アルファベティカルに項目を立て、3 万語にわたり、当時参照可能だった古典文献について記述したもの。皇帝コンスタンティノス 7 世のもとで国家事業として行われたギリシア古典文献の収集、整理。『スーダ』は、その文化的興隆の中から生まれたものだった。誤伝もあるが、現在では散逸してしまった古代の文献からの引用も多く、他の同種の編纂物と同様に、資料としての価値が高い。

5. ギリシア文献が及ぼした影響

ギリシア古典作品の ^{はこぶね} 方舟 となったコンスタンティノーブル。そこで筆写された作品は、その後イタリアに渡っていった。

1453 年、コンスタンティノーブルはオスマン帝国により陥落した。その前後から、

イタリアに渡ったギリシア人らが古典作品を持ち込んだ。ベッサリオン (Johannes Bessarion、1399?-1472 年) の蔵書は、ヴェネツィアのサン・マルコ図書館を生んだ。ゲミストス・プレトンは、フィレンツェのプラトン学園の主柱となった。

東方からの文化的息吹に触れた人物に、コペルニクス (1473-1543 年) がいた。彼は、当初ボローニャ大学で法律 (ローマ法) を修めた。当時、多くの学生がイタリアの地で、種々の古典 *antiquitates* に触れながら自身の学修を深めていた。彼もまたその埒外にはなく、彼の最初の書物は、7世紀エジプトのビザンツ文人シモカテスのラテン語訳だった。

紙、及びその劣化と保存

三浦 功美子

(伝世舎代表 東洋書画保存修復)

1. はじめに

「モノ」は時間の経過と共に劣化をする。図書館、文書館の所蔵している資料も同様であり、どうにもならないことである。ただし、資料の劣化のスピードを緩やかにすることは可能である。抑制するためには、資料の組成、劣化要因などを理解して、保存するための適切な環境作りが重要となる。

その資料を構築している重要な素材の「紙」について話をする。

2. 紙について

紙は、植物性の短い繊維を水に分散させて、網などで漉きあげて、乾燥させてシート状にしたもの。水素結合によって繊維と繊維が結びついてできている。

◆紙の原料

原料は以下に大別できる。植物から繊維をばらばらにして抽出したものをパルプという。

- 木材パルプ → 針葉樹、広葉樹の木質部。
- 非木材パルプ → 針葉樹、広葉樹の木材繊維を除いた植物繊維
 - 靱皮利用繊維（木の皮、茎の周辺部の繊維） → 楮、雁皮、三椏（和紙の三大原料）、亜麻、大麻、苧麻、青檀
 - 果実利用繊維 → 木綿
 - 茎幹利用繊維 → 竹、稲わら、麦わら
- 回収した紙 → 古紙パルプ
 - 直接植物から取り出した繊維 → バージンパルプ

現在、日本では木材パルプ（古紙パルプも含む）利用の紙が99%を占めている。

◆紙の組成

○ 紙の原料である植物繊維の主成分はセルロース。その他にヘミセルロース、リグニン。

セルロースは植物の種類によって、形状（長さや幅）が異なる。靱皮繊維は、木材繊維よりも長く強靱である。

リグニンは、繊維同士をくっつける接着剤の働きをする成分。パルプを抽出するためには、リグニンを除去する。木材は、非木材繊維原料と比較してリグニンの含有量が多い。

◆紙の製造

○ 植物原料 → 調成 ①繊維（パルプ）の離解（蒸煮法（アルカリ液で煮る）、動力法） → ②漂白 → ③叩解（フィブリル化） → ④薬剤の混合（サイズ剤、填料など） → 抄紙 ①抄く（機械抄き）・漉く（手漉き） → 脱水 → 乾燥 → 表面加工（表面サイズ、塗工など）

○ 繊維の離解のためリグニンを除去する。木材はリグニンが多く含まれているので、強アルカリ液を使う。そのためセルロースを傷めてしまう。紙にリグニンが残留すると、光や酸化により変色や劣化が生じる。

○ 白い紙を作るために漂白をする。漂白剤で塩素系を使うと、セルロースを傷めてしまう。

○ サイジング（滲み止め）は、膠、ドーサ（膠と明礬（硫酸カリウムアルミニウム）混合液）、ロジンサイズ剤、中性サイズ剤。

紙は原料、製造方法によって、質感、色味、用途などが様々である。劣化速度にも差が出てくる。

3. 紙の歴史

紙の発明は、中国の史書『後漢書』によると蔡倫と言われてきた。近年の中国の考古学研究が進み、前漢時代（BC 2世紀）の遺跡から、紙の断片が発見されている。そのため、今では蔡倫は発明者ではなく、製紙技法を改良して書写材料として普及させた人物として評価されている。

○ 中国 1世紀頃に製紙法の完成 麻などのボロ、その後竹、藁、麻、楮、青檀など
サイジング 膠

○ 日本 7世紀には製紙法が伝来 麻、その後楮、雁皮、三桠
サイジング 打紙加工、ドーサ

明治期に、欧米から機械抄きの紙が入ってきた。それを「洋紙」と呼び、古くから日本で漉かれていた手漉き紙を「和紙」と呼び、区別するようになった。

1875（明治8年）に後の王子製紙が操業を開始。当初の原料は木綿のボロで、その後稲ワラが利用された。1889年（明治22年）木材パルプでの製造が始まり、1897年（明治30年）頃から主力の原料になった。

- ヨーロッパ 12世紀以降に普及 ポロ布（亜麻、大麻、木綿） サイジング 膠
- * ホレンダービーター（叩解機）の発明（オランダ 1670年）
- * ルイ・ロベールの抄紙機械の発明（フランス 1798年）
- * ケラーの木材パルプ（碎木パルプ）の発明（ドイツ 1844年）
- * イリッヒの内添サイジング（ロジンサイジング法）の発明（ドイツ 1807年）

以上の発明が、近代製紙工業へと移行、大量生産化ができるようになった。

○ 動力法の機械パルプ（碎木パルプ）は、セルロースと共にリグニンもすりおろしてパルプにする。そのため、リグニンが残留したままになる。化学パルプは、リグニンを蒸煮法により強アルカリ液で除去した繊維である。

○ ロジン（松脂）サイジングは、ロジンを紙に定着させるために硫酸アルミニウム（硫酸バンド）を添加する。硫酸アルミニウムは酸性なので、抄紙した紙は酸性になる。

近代化する以前は、非木材パルプを手漉きにより紙を製造していた。強い薬品を使用せずに保存性の優れている紙である。19世紀後半から製造された紙が、半世紀ほどで急速に劣化して粉々になった。1950年代頃から酸性紙問題として注目されるようになった。

4. 紙の劣化について

紙資料の劣化の要因は様々である。紙の外部からの影響、紙の内部からの劣化。複合的に生じて、劣化や損傷が拡大していく。

紙資料の外部からの影響として、以下が挙げられる。

- 温度・湿度：高温度、温湿度の激しい変動や繰り返し → 紙の脆弱化、破損。
低湿度（RH）→ 紙の柔軟性（しなやかさ）が失われる。
高湿度（RH）→ カビの発育。
- 光：強い光、紫外線 → 紙の変色、脆弱化（リグニンが原因）。色材の変色、褪色。
- 空気汚染：窒素酸化物、ホルムアルデヒド、酢酸など → 変色、脆弱化。
- 生物：カビ → 染み、脆弱化（セルロースを養分として分解）。

虫・動物 → 虫損、汚損。

○ 天災：地震、火災、水害 → 破損、汚損、消失

○ 人災：取り扱い、盗難 → 破損、消失

* 酸化による劣化 → セルロースが空気中の酸素と徐々に化合して脆弱化。

* 酸の移行(マイグレーション) → 酸性物質が接している資料へ移行して変色、脆弱化。

紙の内部からの劣化は、紙の中に含まれている酸によって生じる。

○ 酸性紙問題 → サイジングに使われた硫酸アルミニウム(硫酸バンド)が、紙の中に含まれている水分と化学反応(加水分解)を起こし硫酸になり、酸性化する。セルロース分子が切断され、粉々になっていく現象。

5. 保存について

近年(1980年代)、予防的保存 Preservative Conservation の考え方が主流になってきた。資料を取り巻く環境(温度、湿度、光、空気汚染、生物、人間など)を整えて、劣化の要因を抑えていこう。

「問題が起こってからでの対処—治す」ではなく、「問題を予測し、予防する—防ぐ」。

酸性紙の原因が解明され、保存性のある「中性紙」が製造されるようになった。近年、出版物での中性紙使用率は95%を超えた。

保存の対策

○ 中性紙容器への収納 → 塵埃、汚染ガスからの保護。温湿度の急激な変化の緩和。

○ 脱酸性化処理 → 紙の中に生じる酸を、アルカリ物質で中和。

○ 修復 → 資料の劣化損傷の状態、将来の保存・活用方法等によって、処置の選択を行う。資料に負担が掛からない処置。可逆性のある、資料に安全な修復材料の使用。

6. 終わりに

資料の保存管理は、環境を整備することが重要である。日頃からの観察、情報収集、情報の分析記録を行うこと。異常を早期発見して、素早い対応ができるようにすること。組織全体での取り組みが大切になってくる。

〈参考文献〉

- 鈴木英治 『紙の劣化と資料保存 シリーズ本を残す4』日本図書館協会（1993）
- 稲葉政満 『図書館・文書館における環境管理 シリーズ本を残す8』日本図書館協会（2001）
- 木部徹・鈴木英治『本の紙の劣化と保存—歴史に沿って』CAP編集室（1989）
- 安江明夫・木部徹・原田淳夫編集『図書館と資料保存』雄松堂出版（1995）
- 園田直子編 『紙と本の保存科学』岩田書院（2009）
- ワーキング・グループ編『防ぐ技術・治す技術—紙資料保存マニュアル—』日本図書館協会(2005)
- 小宮英俊『紙の文化誌』丸善ライブラリー（1992）
- 財団法人紙の博物館『わかりやすい紙の知識』（2007）
- 財団法人紙の博物館『和紙と洋紙』（2004）
- 国立国会図書館収集書誌部資料保存課 「民間出版物の中性紙使用率 95%に」『国立国会図書館月報』（No.568、2008.7）

ユストゥス・メーザー『祖国愛の夢』を読む

鈴木 直志

(中央大学文学部教授)

『祖国愛の夢 (Patriotische Phantasien)』は、18世紀後半のドイツで活躍したユストゥス・メーザー (1720-94) の代表作の一つです。この著作はゲーテの愛読書だったことで有名です。彼は『詩と真実』の中でこの作品を「つねに完璧で余すところなく、しかもつねに快活で、多少の皮肉をまじえ、あくまで精密で誠実、かつ善意に満ち…」と激賞していますが、ここまで手放しの絶賛ではないものの、メーザーの『祖国愛の夢』は今日もなお、ドイツ社会思想史上の古典としてきわめて高い評価を受けています。

メーザーについては、近年わが国でもすぐれた研究書や翻訳 (坂井榮八郎『ユストゥス・メーザーの世界』刀水書房、2004年、J・メーザー『郷土愛の夢』(肥前榮一他訳) 京都大学学術出版会、2009年) に恵まれました。しかし残念ながら、いまだによく知られているとは言いがたい状況です。ひょっとするとそれは、われわれにメーザーの思想を受容する素地が乏しいからかもしれません。例えば、メーザーはしばしば「保守的啓蒙家」といわれるのですが、わが国の一般的な知識ではここでいう「保守主義」はおろか、「啓蒙」も十分に理解できないように思われます。また、表題の「祖国愛」がメーザーの時代のヨーロッパで持っていた意味内容は、現在の日本のそれとはおよそ異なっているので、言葉どおりに受け取れば、われわれのほとんどは誤解してしまうことでしょう。本講演ではこれらの点を念頭に置きながら、メーザーの思想がどのようなものなのか、また『祖国愛の夢』はどのような著作で、その古典的価値はどこにあるのかについて、作品の一部を読みつつ考えてみようと思います。

1720年、ユストゥス・メーザーは北西ドイツのオスナブリュック司教領という小国 (面積は東京都とほぼ同じ) に生まれました。父は法務庁長官、母は市長の娘と、彼の家はオスナブリュックの上層市民に属する家柄でした。大学で法学を学んだ彼は、国務弁護士や貴族身分団の法律顧問といった重職のみならず、枢密書記官や枢密法務参議官など政府の要職をも兼務しました。君主から全幅の信頼を得ていたメーザーは、こうしてオスナブリュック司教領の政治の中樞を担うようになります。裏方としてで

はありますが、市民身分の法律実務家が、立法・司法・行政の三権にわたって司教領の政治を実質的に動かしたのです。

メーザーは有能な実務家ただただけではありません。多分に政務上の必要から郷土オスナブリュックの歴史研究に携わった彼は、未完の大著『オスナブリュック史』（1768-80年）を世に問い、歴史家としても注目されます。それは、「疾風怒濤」のマニフェストとなったヘルダー編『ドイツの芸術と様式』（1773年）に、この著書の序文が収録されたことから明らかでしょう。さらにまた、メーザーはすぐれたエッセイストでもありました。1766年、彼は政治的啓蒙のために政府広報誌的な週刊新聞を創刊し、忙しい政務の中、政治・社会評論のエッセイを1792年まで寄稿し続けました。彼の小論は大変評判がよく、やがてそれらの多くは本にまとめられます。このエッセイ集こそが『祖国愛の夢』（1774-86年）なのです。

さて、メーザーはこれらの小論を通じてどのような考えを表したのでしょうか。19世紀の著名な経済学者ロッシェは、メーザーを「18世紀最大のドイツ経済学者」と評した上で、その思想的特徴は「民衆の日常生活への深い理解」と「歴史的な方法や考え方の導入」にあると述べていますが、ここでは「歴史が作ってきた社会」と題して、特に後者に重点を置いてメーザーの思想を考えてみたいと思います。出発点になるのは「昔の人はそんなに愚か者だったはずはない、という思いを手放さないでおく」との彼の言葉でしょう。メーザーの同時代、啓蒙の理性主義者はしばしば、「野蛮」で「非文明的」だった過去のヨーロッパが「進歩」の摂理の下に「文明化」したと考えましたが、「昔の人はそんなに愚か者だったはずはない」と信ずるメーザーは、これとは真っ向から対立する歴史観、社会観を呈示したのです。

彼にとって、「進歩」や「文明」の名の下に歴史的多様性を押しつぶし、画一化を図る普遍主義は、斥けられねばなりません。したがって、プロイセンに代表される、当時の政治的トレンドだった啓蒙絶対主義は、法典編纂や行政機構の統一化などで領内の多様性が失われるがゆえに、メーザーは批判的でした。また、同じプロイセンのフリードリヒ大王がフランス文化を基準にしてドイツ語やドイツ文学を見下す発言をした時には、メーザーは多様性とオリジナリティの擁護という立場から、これに厳しい反論を加えたのでした。

メーザーの社会観は、国家株式論というきわめてユニークな考え方によく表れています。彼は『オスナブリュック史』の中で、土地所有者を主体に据えた歴史を構想しました。王侯貴族が歴史叙述の主役であるのが当たり前だった当時、メーザーのこの考え方は革命的ともいうべき視点の転回なのですが、それはともかく、古代のザクセン（ゲルマン）の歴史研究から得られた彼の国家株式論は、土地所有者を「国民の真の構成要素」と見なす考え方を土台にしています。彼は国家を、土地所有者たちが生

命と財産を守るため、第一の社会契約を結んで形成された防衛共同体であり、土地株式を持つ株主による株式会社と把握したのです。このような国家はメーザーにとって、おおよそカール大帝の時代までのオスナブリュックで実現されていた「黄金時代」の国家でした。やがて社会が移り変わり封建制が普及すると、土地所有者は兵農に分離し、さらに貨幣経済が普及して軍事が財政問題になる時代を迎えると、貨幣株式を持つ新参の商工業者たちが原定住者と第二の社会契約を結び、国家株式会社に参入します。メーザーの見るところ、オスナブリュックの政治社会は、このようにすべからず歴史的に作られたものであって、この社会を動かすことができるのは株式を持つ者だけなのです。農奴に身を落とした者や寄留民にはその資格がありません。人権という普遍的原理に基づいて彼らに政治参加の権利を認めることは、この論理に従えば歴史を破壊する暴挙であり、それゆえ彼は、フランス革命に対しては強く反対の立場を示したのです。

人権に代表される普遍主義や平等思想に背を向け、歴史が育んできた社会をそれらから守ろうとするメーザーの思想は、保守主義という考え方に属するものです。しかし、他方で彼の保守主義は、すでに見たように、古ゲルマンの歴史研究という理性的営みから生まれたものであり、しかもその歴史像には社会契約論という近代的な政治理論が埋め込まれています。メーザーは明らかに啓蒙の人でもあるのです。この点を見落としてはならないでしょう。

同じことは「祖国愛（パトリオティズム）」についてもいえます。1798年にドイツで刊行されたある百科事典にはパトリオットという項目があるのですが、そこでは「自分自身の最善が損なわれようとも全体の最善を求める者、自分自身の幸福よりも全体のそれを優先する者」と定義されています。つまりパトリオットとは、市民的公論に基づく新しい社会を指向し始めたこの時代において、君主や教会の支配の客体であることをやめ、祖国という共同体の一員として自らが支配の主体たろうとした「公民」のことなのです。したがって祖国愛は、たんに生まれ住む土地への愛着を意味するだけでなく、新しい公民思想であり、啓蒙の所産なのです。メーザーの『祖国愛の夢』もこの文脈で理解されねばなりません。

実のところ、冒頭で引用したゲーテの『詩と真実』には、これまで述べてきたメーザーの思想や『祖国愛の夢』の特徴が、驚くほどの確かつ要領よくまとめられています。最後にそれを引用しておきましょう。

全体が一つの意図の下で書かれ、真に一体をなすこれらの小論文で、もっとも注目すべく、また賞賛に値するのは、公民（シティズンシップ）に関するきわめて行き届いた知識である。われわれは、一つの制度が過去に基づき、今日なお生きているのを見る。一面では伝習に固執し、他面では事物の運動と変革を妨げることができない。…

彼の提案、彼の勧告はけっして夢想的なものではなかったが、しばしば実現しがたいものであったので、そのなかのすべてが現実的なもの、実現可能なものから遊離していないにもかかわらず、彼はその論集を『祖国愛の夢』と呼んでいる。(岩波文庫版『詩と真実』243頁以下。一部改訳)

西洋古典資料をもっと知るために

岡本 幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料は現代の本とは異なる点を多く持っている。印刷に用いられる紙は、麻（主として亜麻）のボロ（古着）を原料にした手漉き紙である。手漉き紙には様々な大きさの紙があり、印刷をしてから紙を折って折丁を形づくる。紙の方向を変えながら折畳むことによって2紙葉のフォリオ判、4紙葉のクォート判、8紙葉のオクタボ判などの折丁になる。印刷は鑄造活字の組版による活版印刷であり、一冊分のテキストが一度に印刷されることは少ない。多くの場合、印刷の終えた組版をばらして残りのテキストを印刷する。印刷が終わるまでに紙が替わってしまう場合もある。校正や検閲などにより印刷が修正されてページが差し替えられる場合もある。よく見ると、一部の折丁だけが変色している例が見受けられる。印刷・出版と製本は別々に行われることが普通であって、出版時には正式な製本がされずに仮とじの状態で開催され、購入者がそれぞれ製本を依頼する。同じ出版物であっても製本は異なったものになる。そのため西洋古版本には、所蔵の履歴が色濃く形態に反映されることになる。タイトルが同じでも同一の版とは限らず、同一の版であっても製本などの形態が異なる。出版された当時の姿のまま（仮とじ本）で今日まで伝わっている場合がある。安価で簡略な製本を施されて余白を大きく断裁されてしまうこともあれば、豪華で華麗な製本が施されてページの余白がたっぷりと保持されている場合もある。製本が傷んで修復を施したり、新たに製本し直す場合（再製本）もある。製本時にメモのための白紙を付け加えたり、蔵書票が貼付されたり、本紙にメモやアンダーラインなどが書き込まれたりすることもある。西洋古典資料には形態の履歴がある。製本の仕様は一様ではなく、製本構造や装飾様式、使用される材料の性質も多種多様である。

西洋古典資料の保存はこのような多様性を持った本を対象として取り組むことになる。どのような特徴を持った本がどのくらいあるのか、傷んでいる本がどれだけあってどんな傷み方をしているのかが具体的に分かると保存手段を考えやすくなる。これからも傷む可能性のある本を予測することができて、資料価値や稀少性に加えて利用頻度も勘案しながら処置の緊急性について理解もできれば、保存手当の優先度を決

める手がかりとなり心強いものになる。このような情報を効率よく記録して分析するための手段が調査票である。

西洋古典資料の何を調査すればよいのだろうか。資料を保存する、つまりいつでも利用できる状態に管理しておくために必要な情報が得られることが大切である。それはモノとしての本の詳細なデータであり、製本の構造、使用されている材料、構造と材料の性状と劣化状況から情報を読み取ることができる。それらの項目について以下に考察する。

1. 製本構造

西洋古典資料は現代の本とはまったく異なっている。歴史的に特有で異なった製本構造があって、それぞれが固有の力学的体系で成り立っている。製本構造の特徴は、主として表紙と中身の接続の仕方、異なった綴じ方、見返しの構造の違いに現れている。使用される材料とその性質が大きく異なっており、取扱いには注意が必要である。

1-1 綴じの構造と材料

印刷を終えた紙葉を折って折丁ができると、紙叩き職人がハンマーで紙を叩いて平滑にする。それから折丁を糸で綴じて連結して1ブロックにまとめる。

西洋古典資料の綴じの特徴は折丁の折り目の内側を綴じる「中とじ」で「とじ支持体（以後「支持体」と略す）」を利用して折丁をブロックにまとめていることである。折丁を「中とじ」する「とじ糸」は折丁の末端で次に綴じる折丁に移動する時に糸どうしを絡めて結びを作る。しかし末端以外では糸どうしが絡み合うことはなく、多数の折丁を1つのブロックにまとめられるのは支持体に糸を絡めて折丁を固定しているからである。支持体を利用した綴じを「支持体とじ」と呼ぶ。綴じの支持体に使われる材料は、製本が健全な状態のときには確認が難しい。綴じ糸の運針や見返し（効き紙）に現れる凹凸などから判断する。

支持体には様々な材料が使用され、とじ糸の絡め方も様々である。ロープまたは紐状の麻繊維やテープ状の革（鞣し革、トーイング革）や羊皮紙・布テープなどが支持体として用いられる。綴じ糸は麻糸（亜麻や大麻）であることが多い。綴じ糸が支持体をくると一巻きしながら綴じる方法と、巻かずに支持体の外側を通過して綴じる方法とがある。前者では背に突起を形成し、とじが糸しっかりと支持体に巻き付いて折丁が固定され隣接する折丁との連結がしっかりしている。支持体を複数回巻き付けてから次へ進む場合もある。支持体2本を巻きつけ

する場合もある。複数折丁を1運針で綴じる「抜きとじ」が併用される場合もある。とじ糸による折丁への負荷が少なく保存性に優れている。

後者では細い支持体が背に埋め込まれるか厚みの少ない支持体が使われる場合が多い。背に突起を作ることがない。とじ糸と支持体の絡みが緩くなる傾向があり、隣接する折丁との連結が緩い。とじ糸による折丁への負荷も大きい。複数折丁を1運針で綴じる「抜きとじ」が併用されると、さらにまとまりが緩くなる。作業時間が短いメリットがある。

本の出版時には本格的な製本をせずに、流通過程でバラバラにならないように本文紙葉をまとめた「仮とじ」が行われた。支持体を使わずにとじ糸どうしを絡めている。本格的な綴じではなく、そのまま利用に供すると短期間で綴じが劣化する可能性が高い。

19世紀以降の製本では、徐々に機械力で綴じる方法が採用されて、糸または針金を使って綴じる方法が加わった。針金で綴じる場合の支持体は寒冷紗のように背にあてがわれる丈夫な布である。各折丁が針金で布に固定されることで、背の布が支持体のような役割をして折丁のブロックが形成される。針金で綴じた本は、湿度の影響で錆を生じて折丁紙葉が分離する場合がある。機械による糸とじの場合は、布テープ支持体が付属するが機能的役割は低い。接着剤の塗布によって折丁ブロックを形成する。綴じはすべて中綴じが基本であるが、平綴じが部分的または全面的に用いられる場合もある。

1-2 表紙の接続と材料

表紙の芯材には木の板やボール紙が使われた。初期のボール紙は紙を貼り合わせて作ったベーストボードで16世紀～18世紀まで使われた。その後はローブ繊維を使った硬いミルボードが用いられるようになり、19世紀以降は現在と同じようなボール紙が使われた。ボード芯材がまったく使われないこともある。

綴じの終わった本は支持体を使って表紙ボードを接続した。折丁を綴じて支持体で表紙ボードを接続する方法を「とじつけ製本」と呼んでいる。ボードを接続してから表装材を貼る。

表装材に穴を開けて支持体を通して接続する方法を「リンプ製本」と呼んでいる。支持体だけでなく「はなぎれ芯材」も表装材の接続に使われる。表紙ボードが用いられる場合と用いられない場合とがあるが、支持体が接続するのは表装材のみである。使われる表装材のほとんどが羊皮紙である。その他は厚手の手漉き紙である。表装材を貼ってから折丁ブロックと接続する。

綴じた折丁ブロックとは別個に作った表紙を背貼布（寒冷紗）を援用して接着

接続する方法を「くるみ製本」と呼んでいる。表装材を貼ってから折丁ブロックと接続する。上記それぞれの製本構造には複数のバリエーションがある。

表装に使われる皮革にはタンニン革、羊皮紙、トーイング革がある。革がボロボロになる化学的劣化現象は 19 世紀以降のタンニン革で起きている。その劣化の仕組みは十分に解明されていない。羊皮紙は湿度の変化に敏感で波打ちや縮み現象が起きやすいが、科学的劣化の心配がない。トーイング革は時代の経過とともに柔軟性を失ってくる。トーイング革による製本は穴なしの背がほとんどで、背の柔軟性も失われる。

製本用クロスは 1820 年代に開発された。製本クロスの登場によって、製本工程の機械化が始まった。木版プリントやマーブル紙、ペーストペーパーなどの装飾紙が製本に使われ始めたのは 17 世紀であるが表装材として用いられたのは 18 世紀末からと考えられる。表紙の箔押し装飾の様式やマーブル紙の模様は製本年代特定の役に立つ。

1-3 見返しの構造と材料

表紙と本（中身）との接続を内側から構造的に支えているのが「見返し」である。見返しは製本時に折丁ブロックに付け加えられる紙葉である。その付け加え方によって「とじ見返し」「巻き見返し」「貼り見返し」の種類がある。「とじ見返し」は見返し用紙が独立した折丁になっていて製本時に綴じられる。いくつかのバリエーションがある。「巻き見返し」は見返し用紙を最初と最後の折丁に巻きつけて綴じている。「貼り見返し」は主として 19 世紀以降の方法で見返し用紙を最初と最後の折丁のノドに貼り付けている。見返しの構造によって、表紙開閉による負荷の影響の仕方が異なる。今後の利用による負荷の影響を勘案する必要がある。

見返しに使われた紙は、製本年代の特定に役立つことがある。用紙の原料の違い、簀の目の有無の違いは有用な情報であり、透かし文様があればある程度の時代が特定できる場合がある。簀目のない手漉き紙は 18 世紀中ごろ以降に生産された。碎木パルプは 1860 年以降、化学パルプは 1880 年以降に実用化されたと考えられている。マーブル紙やペースト・ペーパーなどの装飾紙が用いられるのは 17 世紀以降である。マーブル紙の場合は時代による紋様の変遷があり、ある程度の時代を特定できる可能性がある。

1-4 背表紙

表紙を開いて本を読むという行為から発生する負荷は、背の柔軟性と大きく関連している。背表紙の歴史的構造にはいくつかのバリエーションがある。大きく

分けると背表紙に芯材の有るものと無いものがある。芯材が無い場合は、背に表装材が直接貼られている。芯材のある背表紙では、本の背と背表紙との間にすき間ができる場合（穴あり）とできない場合（穴なし）とがある。しかし背表紙の構造と柔軟性にはあまり関連性がないように思われる。柔軟な背の本では、本の開閉時に発生する負荷が少ないと考えられる。

2. 劣化

製本構造の劣化と材料の劣化の両方について現状を客観的に記録するのが望ましい。劣化は材料の劣化として顕現化するが、構造の劣化が材料の劣化に大きな影響を与えている場合が多い。保存にとって重要な劣化を読み取る必要がある。

2-1 表紙の劣化

構造劣化としては表紙ジョイントの傷み（表紙の欠損、表紙の分離、ジョイントの傷み）、背表紙の傷み（背表紙の欠損、背表紙の分離、ジョイントの傷み）などを記録する。表紙接続の構造や、背の柔軟性などを参考にしながら劣化要因と今後の保存対策を立てることが可能である。

材料の傷みは（表装材の劣化、破損、欠損、損傷および芯材の変形）などを記録する。近代のタンニン革は化学的劣化が深刻であり、接触する紙も大きな損傷を受ける。それ以外のタンニン革にも酸性領域で安定している性質があり、接触する紙が茶色に変色している。酸性劣化であることにまちがいないが、歴史的な所与の組み合わせでもある。化学的劣化とは区別すべきであろう。これらの傷みから保存箱や保護ジャケットの必要性が考えられる。

2-2 綴じの劣化

綴じ支持体の切断による表紙の分離・欠損。綴じ支持体と綴じ糸の切断による綴じの分解（ブロックに分割、折丁単位でバラバラ）。綴じ糸の切断によるページの分離。切断していないが綴じがゆるんでいる場合もある。針金の錆びによるページの分離。綴じの劣化は、そのまま利用を続けるとさらに劣化が進行する場合が多く、専門家による修復を待ちながら保存箱に収容する方法が考えられる。

2-3 見返しの劣化

ノド破損は単なる材料劣化というよりは構造的な負荷による破損と考えられる。よく理解せずに表面的な修理を施しても構造的負荷は解消されず、修理材料が強ければ隣接するほかの部位が構造的負荷を受けて破損する可能性が高い。材料の劣化とともにノド破損のメカニズムに注目すべきと考えている。表紙及びペ

ージの開閉による負荷が製本構造を通してどのように影響を与えているのかを
考えたい。19世紀以降に製本された場合には見返し用紙が酸性化する可能性があ
る。

2-4 本文紙の劣化

物理的または生物学的な損傷のほかに、印刷された本文紙の変色にも注目する。
サイジングに使われたミョウバンや印刷インクによるものと思われる変色や紙
の周囲からの変色などは化学的要因による劣化と考えられる。

3. その他

製本構造や材料とは別に保存情報として有用な項目を調査することも必要である。
製本の特色を現わす留め具、小口装飾、はなぎれについての情報も有用である。製
本の修理履歴や再製本に関する情報は資料のオリジナル性についての情報である。
所蔵の履歴に関する情報（蔵書票、蔵書印、インクなどによる書き込みなど）が修
理作業の過程で損傷を受けないように注意する必要がある。インクによる書き込み
は酸性劣化の原因となる可能性があり、重度の傷みには優先的な措置が望まれる。

画像データを調査票に利用すると、調査項目だけでは理解しにくかったデータが
視覚化されて理解しやすくなる。間違いにも気づきやすくなる。手間がかかるが利
点も多い。

調査票によって製本構造や材料などの形態的データと傷みのデータを数量的に把握
することができる。データを分析することによって潜在的な劣化の可能性を読み取る
ことが可能である。表紙の分離、綴じの傷み、見返しノド破損のような重度の劣化は、
経年による現象というよりは利用による負荷を適切に解消出来ない製本構造上の理由
があるものと考えられる。そのためにも保存メンテナンス作業が重要になる。

(資料図版を当日配布します。)

カーネギー国際法古典叢書探訪

大中 真

(桜美林大学リベラルアーツ学群人文学系准教授)

はじめに

今回は『カーネギー国際法古典叢書』を紹介することで、社会科学の古典とされる国際法の名著の多くがどのような意図により復刊され、今日われわれが手に取ることができるようになったのかを探訪してみたい。幸いなことに一橋大学附属図書館にも、完全ではないもののその叢書の多くが所蔵されており、中世後期以降の古書原典と英語訳とを、われわれも直に確認することが可能である。まず最初に、そもそも『カーネギー国際法古典叢書』(以下、単に『叢書』と略)とは一体何かを説明し、次にその全貌を明らかにしたうえで、最後に現在まで続く影響について触れたいと思う。同叢書について、筆者は過去に拙稿を2篇ほど書いているので(巻末の参考文献を参照)、ここでは社会科学古典資料としての価値という点にやや重点を置いて話を進めていきたい。

1. 叢書の誕生

叢書の原題は、*The Classics of International Law* といい、アメリカのカーネギー国際平和財団が1911年から1950年までの約半世紀近く、二つの世界大戦を挟んで刊行し続けた、国際法古典の大規模な復刊事業を指す¹。同財団は、有名なアメリカ人の鉄鋼王アンドリュー・カーネギーが、戦争廃絶と世界平和実現のために巨額の私財を投じて設立した組織であり、今日では世界有数の国際問題に関するシンクタンクとして地球規模で活発な活動を続けている。カーネギー財団が設立されたのは1910年だが、当時は国際法の進歩と発展によって人類は文明化され、戦争の野蛮さを回避できると信

¹ 国際法史研究者の松隈清は、「古典国際法全書」と訳しているが、同じものである。松隈清『国際法史の群像——その人と思想を訪ねて』(酒井書店、1992年)111、250頁。松隈は同書の中で、「全書」は全38巻であると記しているが、筆者の調査により正確には全22巻40分冊であることが判明している。

じる知識人も多かったことが、財団設立直後から大規模な国際法古典叢書の刊行事業が開始されたことと密接な関連があると、筆者は考える。

もう一人、叢書の誕生にあたって触れなければならない人物が、20世紀前半のアメリカ国際法学界の大立者であった、ジェイムズ・ブラウン・スコットである。彼はコロンビア大学をはじめ多くの大学で国際法の教授として活躍しながら、同時に誕生したばかりのカーネギー財団の国際法部門の責任者として運営に携わり、国際法の古典を復刊するという大事業の実現に、編集主幹として携わることとなった。スコット自身、この計画に並々ならぬ意欲を燃やしていたようで、東ローマ帝国のユスティニアヌス大帝が編纂を命じた『ローマ法大全 *Corpus juris civilis*』の向こうを張って『国際法大全 *Corpus juris gentium*』を完成させようとしていたことが、残されたスコットの手紙から判明している。

編纂にあたっては、スコットの強い意思が反映された。まず、原則として底本は初版を用いることとし、もし底本が版を重ねている場合には著者自らが朱を入れた最後の版を採用することとされた。また、原著者の意図を正確に理解するため、後世の法学者や思想家が欄外にびっしりと書き入れた注釈は採用しないことも、最初に確認された。さらに、各著作には国際法の権威による序論が寄稿されるべきこと、原著が非英語（すなわちラテン語、ドイツ語、フランス語など）の場合には原文と英語翻訳文とが併録されることも決められた。

以上から推察されるように、スコットが叢書の刊行を強力に推し進めた理由の一つとして、法学を志すアメリカの大学生や研究者のために役立てたい、という彼の思いがあった。20世紀初頭には、アメリカ人の学生が国際法古典を読むためにヨーロッパへ渡るのは難しいことであつたし、そもそもラテン語やヨーロッパ各国語を読みこなせるアメリカ人学生もごく少数であつたろう。厳密な考証を経て全著作が英語に完訳されたことで、叢書の価値は当初スコットが想定したアメリカ人学生のみならず、世界中の学生や研究者にとって極めて大きなものとなったのである。

2. 構成内容

叢書はカーネギー財団から潤沢な資金を得て、記念すべき第1巻、ズーチの『フェキアーレ法と裁判、すなわち諸国間の法、およびそれらに関する諸問題の解明』（原著は1650年刊行）が1911年に出版された。これ以降、アヤラ（第2巻）、グロティウス（第3巻）、ヴァッテル（第4巻）と、続々と出版が続いた。スコット自身は、全巻の刊行終了を見ずして1943年に亡くなったが、財団の同僚たちが仕事を引き継ぎ、最終巻の第22巻が1950年に出版され、完結した。

叢書中でもっとも古いものは、第8巻に収められたダ・レニャーノ『戦争、報復、

決闘についての論考』で、1360年に書かれたとされるものである。具体的にみていこう。まず第1章の序論でレニャーノの伝記、続いて彼の著作目録と解説、さらに叢書が採用した原著写本についての解説が続く。第2章には、今回の叢書刊行のための調査によりボローニャで発見された1393年版とみられる写本、第3章では同じ1393年ボローニャ写本を手書きからラテン語活字におこして改訂を施したものが、第4章ではそれをさらに英語訳したものが、最期に第5章で、これまで最古のものと思われてきた1477年版のラテン語写本（ただし欠落があり、改ざんがレニャーノの曾孫によってなされている不完全版）が収められ、1冊となっている。

逆に一番新しいものは、第19巻のホイートン『国際法原理』で、原著は1836年に刊行されたが、叢書ではアメリカ国内で広く読まれた通称ダナ版（R. ダナによって膨大な註が入れられた1866年版）をテキストとして採用している。底本が英語版のため、この巻のみ翻訳がなく、1冊に収められている。しかし、それ以外のほとんどの巻は、原著の再版が第1巻、英語訳が第2巻の2分冊という構成になっている。因みに、原著つまり底本の再録にあたっては、当時の先端技術であったコロタイプ印刷（写真製版）が用いられ、資料的価値を高めている。

編集主幹スコットのこだわりは、装丁にも見ることができる。彼は底本を確定するにあたって、先のレニャーノの巻に象徴的なように正確さを徹底的に追求した。また巻頭に載せる肖像画一つを取っても、自らの知名度と地位を活かしてヨーロッパ各国の国際法学者や図書館に打診し、写真やコピーを自らの手許に取り寄せ、時代考証的にももっとも適切なものを選ぼうと努力していた。各巻に掲載された、当時最高峰の国際法学者たちによる長文の解説論文は、それだけでも極めて学術的価値の高いものであり、スコットが完璧さを求め続けた結果、この叢書はまさに古典として世界中で受け入れられることとなった。

おわりに——現代に続く影響力

叢書に収められたのは、どれも国際法史の古典として重要なものばかりであるが、中でもグロティウスの『戦争と平和の法』（第3巻）は、ラテン語原典と照合して信頼できる英語版を読めるという点で大変意義がある学問成果となり、多くの研究書で一次資料として引用されることとなった。第2分冊英語版は、原著初版刊行300周年に合わせ1925年に出版され、折しもグロティウス再評価が進んでいた時期とも重なり、カーネギー叢書の名声を高めることにも繋がった。

刊行されたテキストもさることながら、前述したように原著者と作品についての解説論文は、その解釈も含めて、さらに多くの国際法学者、国際関係論の研究者たちに引用され、拡散していった。1911年から1950年までカーネギー財団から刊行された

版はすぐ絶版となり、1964年にはニューヨークのオセアナ社から、さらに1995年にも同じくニューヨークのウィリアム・S・ハイン社から、それぞれ全巻一括で再版されていることが、現代まで続く影響力の大きさを物語っていると言えるであろう。

【参考文献】

大中真「カーネギー国際法古典叢書の誕生——J. B. スコットの書簡をめぐって」桜美林大学『桜美林論考 人文研究』第6号（2015年）101-114頁。

大中真「国際法史研究の起点——カーネギー国際法古典叢書目録」『一橋法学』（2016年）第15巻、第1号、53-68頁。

東大駒場博物館『マザリナード集成』展の試み

一丸 禎子

(学習院大学非常勤講師)

はじめに

昨年秋に東京大学駒場博物館において『マザリナード集成』展（会期 2016 年 10 月 15 日-12 月 4 日）が開催されました。この展覧会は東京大学総合図書館の所蔵するコレクション『マザリナード集成』を初めて一般に公開したものです。44 巻約 2700 点の文書からなるこのコレクションは 1978 年に購入され、総合図書館の貴重書として通常は一般の方の目に触れる機会はほとんどありません。

しかしながら、このたび、マザリナード・プロジェクトによりオンラインのデジタル・コーパス化が実現し、仮想空間における閲覧が可能になったことを記念して、ぜひこの機会に「本物」のコレクションを見ていただいと展覧会が企画されました。

じつはマザリナード・プロジェクトは古文書のデジタル化だけでなく、資料のデジタル化によって生じる研究環境の変化に対応しつつ（Web 上の研究用プラットフォームの構築、研究成果の管理等）、そこに生じる諸問題（翻刻権・知的財産の保護、研究者間の交流等）を解決しながら、新しい研究方法を実験する比較的大きな枠組みの計画なのです。この枠組みの中で、展覧会は実物を紹介しながら研究過程を可視化するという役割を担っています。

この講習会ではしかし、そうした研究との関わりはひとまず置くとして、むしろ博物館学にはまったく素人の一研究者がこの展覧会を機に現場で直面した「展示との格闘（もっと正確には悪戦苦闘）の記録」として参考にしていただければと思います。

●東京大学コレクション『マザリナード集成』とは

「マザリナード文書」とは 17 世紀フランスのフロンドの乱（1648-1653）の間に印刷・出版、あるいは手書きで回覧された文書です。約 5000 種類が現存し、大小様々なコレクションとして主に図書館に保管されています。古書市場では現在も商品として流通しています。

もちろんフランスの内乱の間に出版されたものですから、フランスにあるコレクション（たとえば、マザリーヌ図書館）が世界で一番大きいのですが、当時の外交ルートを通じてヨーロッパ全土（たとえばドイツのヴォルフエンビュッテルやバチカン市国）に拡散しています。アジアでは1978年に購入された東京大学コレクション『マザリナード集成』が一番大きいといえますが、日本には一橋大学のコレクションもあります。じつはこの文書を資料として扱うとき、一番の困った問題はこの文書の量の多さと分散なのです。マザリナード・プロジェクトの目標はデジタル化によって、このように世界中に拡散しているすべての文書にどこからでもアクセスできるようにすることにあります。

しかし、一方でデジタル化すると、図書館に本物を見に来なくなるのではないか...という不安が囁かれてもいます。けれども実際にはその逆で、今ではインターネットで検索することができなければ、その存在が外部に認知されない、言い換えれば「この世に存在しない」ことになってしまい、その資料が身近な図書館にあったとしてもわからないということが起きてしまうのです。マザリナード・プロジェクトではこの問題をひじょうに重要だと考えます。デジタル化した資料は「現実に可視化する」必要性もあるのです。

●東大『マザリナード集成』展の特徴（ハード面）：大学内博物館の展覧会

メリットとしては学内あるいは研究者のネットワークを通じて最新の専門知識が動員できるということです。しかも入場無料。反対にデメリットは商業メディアの注目を浴びにくい。採算を考えなくてもいい代わりに、投入できる資金に限りがあるということです。つまり最大の強みである専門知識で勝負することになります。

実際、大学博物館の展示は教育目的でもあり、駒場博物館の展覧会も単体ではなく、複数の関連行事と一緒に総合的に企画されています。学内の行事（駒場祭の特別講座、図書館の展示）だけでなく、学外でも目黒区の生涯学習講座との提携、アンステイチュ・フランセ東京の映画会、展示に密着したギャラリートーク等です。

●東大『マザリナード集成』展の特徴（ソフト面）：展示物は印刷物

東京大学コレクションは5つの下位コレクションからなりますがそのうちの4つは17-18世紀の革装であり、装丁や蔵書票を見るのも楽しいものです。しかし、なんと言っても主役は17世紀に印刷された「テキスト」であり、言い換えるなら白黒の文字。しかも古いフランス語ですから、一般の人には何がなんだかさっぱりわからない。これは大きな問題です。さらに、これがマリー・アントワネットに対する誹謗中傷文書

などであったなら話は別ですが、フロンドの乱もマザリナード文書も日本での知名度は0に等しい。もう少し正直にいいますと知ってる人は皆無。文字ばかりで、しかも知名度の低い歴史的な文書をどう見せるか？これが最大の難問です。

●駒場博物館のストラテジー

1：「わかった気にさせる」

そこで駒場博物館が長年積み重ねてきた経験から導き出されるストラテジーが生きてきます。マザリナード研究の最新の知見を見せながら、それを理解させるのではなく、来た人が博物館を出たときに「何か新しい知見を得た」気になるように解説する。具体的には字は大きく、文章の量はぐっと控えめにするというものです。SNSの発達した現在、Twitterの140文字を目安にすることにしました。

2：来館者のリアクションを展示に反映させる

どこでも展示室の出口には感想を書いていただけるようになっていますが、見る人と展示物との距離をもっと詰めるにはどうしたらいいか？そこで駒場博物館では自前の展示物に限り、来館者が自由にポストイットで見た直後の感想を書けるようにしています（実はこのリアクション自体が分析対象で別の専門研究にも使われます）。

3：完成させない

展示の完成を見守りつつ何度も足を運んでいただくことにより、結果的に来館者の獲得する知見が深まる方向にもっていく（これは入場無料であることを逆手にとった発想です。入場料をいただく展覧会では不可能な方法論です）

●問題は研究者が駒場博物館のストラテジーをどう形にできるか...？

1：文書に自分を語らせる

歴史的に「マザリナード文書」は言説の集合でありながら、それ自体がフロンドの乱の一角を形成する「出来事」であると考えられています。そこで「これは何の文書です」とひとつひとつ解説するのではなく、17世紀フロンドの乱やこの時代のメディアについて語りながら、一点一点の文書を歴史的出来事として、その出現の経過や当時の人の反応がわかるように展示することにしました。

2：空間をつくる

出来事の背景がよくわかるように会場には同時代の絵画と音楽を動員し視覚・聴覚にうったえと同時に、パソコンのライドショーを使って関連する土地の現在の姿も会場に映し、17世紀と「今」を交差させ二つの時間が展覧会の空間に流れるように

してみました。

3：展覧会の案内人キャラクター

この二つの時間の交差点にはおそらく世界で一番有名な本の行商人（17世紀の肖像画）に固有名（ジャック）をつけ、彼を案内役として時間旅行を楽しんでいただくことを考えました。（最近ではバベルの塔の展覧会で「タラ夫」君が大活躍ですが、学内の展覧会ではゆるキャラグッズの販売まではできません。しかしできれば大学や図書館の収益になると思います。）

結びにかえて

東大『マザリナード集成』展の例は大学という閉鎖的な環境での実験です。しかしながら研究者のネットワークを通じて、外部に開かれた展示を構成することはよそでも可能です。ぜひ研究者のネットワークを通じて「越境する展覧会」を試みていただきたいと思います。なぜなら、「もの」は展覧会の期間中ある一点に集められていますが、それぞれが外に広がっていく可能性を秘めている。知的好奇心を満たす予期せぬ出逢いのポテンシャルを高めることが展覧会の魅力だからです。